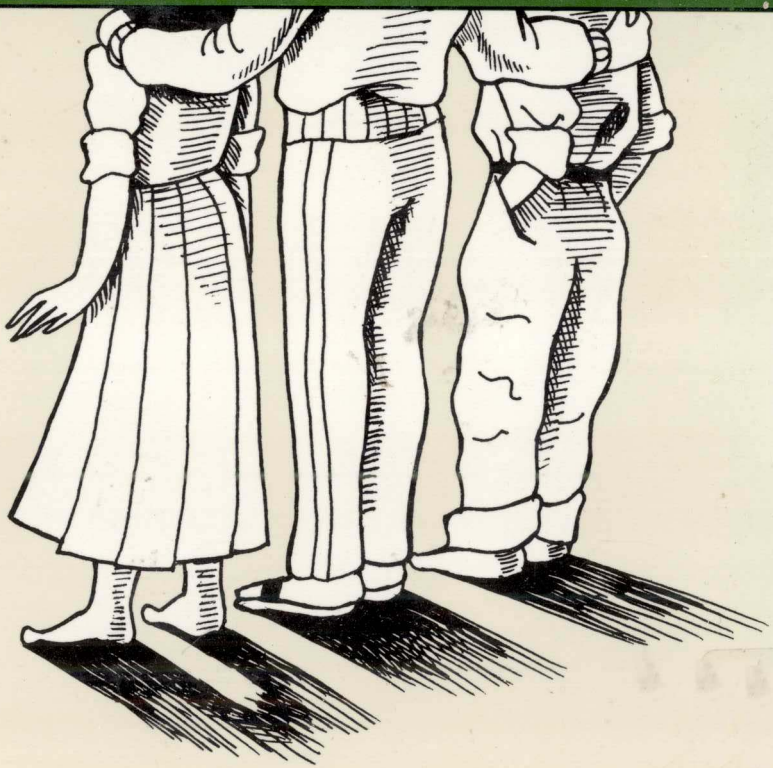
げんこつ先生の100日日記

つっぱり教室

椎谷拓一



学生社

げんこつ先生の100日日記

つっぱり教室

椎谷拓一

〔著者略歴〕

椎谷拓一（しいや　たくいち）

昭和七年、東京都葛飾区に生まれる。昭和三十一年東京学芸大学数学科を卒業後、足立区立第六中学校、中央区立文海中学校、葛飾区立小松中学校教諭を経て、昭和五十一年四月より葛飾区立立石中学校に赴任、現在に至る。

主な著書に「図形・空間の見方」（近代新書出版）「思考の様相」（同上）「数学的考えとその指導」（明治図書）「新しい中学校数学の研究」（近代新書出版）などがある。

© 1985　TAKUICHI SHIYA

つっぱり教室

げんこつ先生の100日日記

昭和60年7月20日　第一刷発行

著者　椎谷拓一（しいや たくいち）

発行者　鶴岡阪巳

発行所　株式会社　学生社

（〒123）東京都足立区鹿浜3-27-14

電話 03(857)3031(代表)

振替・東京 1-18870 番

出版 企画・葛飾 文化の会

印刷・東和印刷　製本・田中製本

6007　落丁・乱丁本はおとりかえします

Printed in Japan

つっぱり教室

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

はしがき

テレビは学園ドラマブームである。若い情熱家の教師が、「頭の古い」教師たちと軋轢(あつれき)をおこしながら、生徒のために尽くす。

しかし、現実の学校の職員室には、ヒーローもスターもいない。い得ないし、いてはならないのである。学校教育は、それぞれの個性を持った教師の集団が協力し合ってこそ効果を上げる。スターやヒーローはむしろ邪魔なのだ。

生徒は「テレビの何々先生みたいな先生になってくれ」という。筋書きができていて、結論がわかっていれば、どんな恰好のいいこともできるし、耳に響きのいいこともいえる。しかし、現実のドラ

マは結果がどうなるかわからないのである。教育に失敗は許されない。ソ連の教育者マカレンコは「工場の製品には何％かのおしゃか（不良品）がみこまれるが、教育の場では一％のおしゃかを創ることも許されない」といった。だから、われわれは、いつもギリギリの線での選択をせまられるのである。今、子どもをどう指導しなければならないかの選択である。

また、現代の社会の進歩は速い。とくに科学技術のこの十年の進歩は目を見はるばかりである。同じように子どもたちも大きく変化した。進歩したのではない。悪化したのである。「つっぱり」といわれる子どもたちも中学生になって急に悪くなったのではない。原因はもっと深いところにある。そこから手をつけなければ、現在の教育の荒廃は治まらないだろう。

現在、「教育臨調」の話題がにぎやかである。「学校選択の自由」とか「大学入試の改善」とか華やかな議論がなされているようだが、今、親たちの求めている教育改革は、そんなものではない。毎日の

学校での現実の問題、「いじめ」「つっぱり志向」「性非行」「登校拒否」などを、今すぐ何とかしてもらいたいのだ。どれをとっても緊急、かつ深刻な問題なのである。高邁な議論も結構だが、もっと現実に目を向けた対策も考えてもらいたいものである。

こう考えて、この本はまず、ごく普通の中学校での普通の教師たちの日夜の指導の実態を、そして、教師たちの苦悩を知ってもらうつもりで書いた。この実態をどうとらえ、解決し、正しい教育の姿をとりもどすには、どうすればよいか。

読者の皆さんとともに考えていきたい。ご高評を乞う次第である。

椎谷拓一

もくじ

はしがき

1 その頭はまずい。なおしてこい（4月6日〜4月15日）……9

始業式早々、つっぱりパーマ／床屋へ行って、出なおしてこい／市川、学校を休む／「こんなうるせえ学校はねえよ」／校内飲食事件／市川が補導された／良い父親とは／再度、家庭訪問

2 先生、私、つっぱりやめるよ（4月18日〜5月9日）……37

私、やっぱり高校へ行きたいもん／沢倉だけ、つっぱりやめて、ずるいよ／いつも、俺にばかり怒るんだよ／あやまれば、いいんだろう！／とにかく、高校へ行け！／学校サボって、喫茶店に

3 つっぱりやめるよ、はウソか（5月12日〜5月17日）……83
彼女には男がいるよ／A、Bではないよ。Cだよ／私、幸せなら、それでいいよ／彼とは別れられないよ

4 つっぱり連中、がんばる（5月19日〜6月6日）……115
俺、うれしいよ／先生、助けてくれよ／トイレで消火器がまき散らされた／校内暴力の前兆あらわる／犯人はわからずじまい／破壊行為がエスカレート／ヤクザから生徒にシンナーが／私、彼と別かれるよ／変化の早さにとまどうばかり／またまた、校内飲食事件

5 修学旅行は行きたいよ（6月7日〜6月10日）……153
私、修学旅行へ行きたいよ／キチンとした服装のつっぱり連中／山ほどみやげを買う生徒たち／楽しかった！　最高！

6 女子中学生現代もよう（6月14日〜6月22日）……169
先輩の看病に疲れて／女生徒二人が家出／二人はどこにいるんだろうか／家出して一週間……／私、やっぱり彼と別かれられない／家出からもどってきた！

7 次から次へ、先生を困らすな（6月22日〜7月20日）……217
〝カツ上げ〟発覚／お前か！ カツ上げしたのは／久しぶりに「いい授業」が／親にいえない病気!?／先生に謝れ！／学校へ行ってもいい？……／父親の協力がうれしい／また、カツ上げ／一件落着したものの／親として当然とるべき責任／ある女生徒、久しぶりの登校／先生！ 助けてよ！／多難の一学期も今日で終わり

あとがきにかえて……276

学生社版あとがき……293

イラスト・清水加奈子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1 その頭はまずい。なおしてこい

始業式早々、つっぱりパーマ

四月六日（水）　始業式

始業式。前途多難の予想される一年間。

新しいクラスの名表が校庭に貼られ、始業式で担任発表。これは毎年期待と興奮のざわめきのなかで行われる。生徒にしてみれば、一年間つき合う担任がきまるのだから、このざわめきは当然ともいえる。新三年の教師の陣容は、二年生のときからの四人に山田先生、谷川先生という転任してきた中堅を加えて発足した。

心なしか、三年生になって、多くの生徒たちは成長した感じがなくもない。しっかりしてきたという感じがする。その反面、かなりの数の生徒に服装・頭髪の違反が目につく。当分は厳しく根気づよく指導しなくては。市川は噂のとおり、パンチパーマをかけている。目が合うと挑戦的である。虚勢を張っている。わざと知らぬ顔で通りすぎる。あとでじっくり話をしてなおさせよう。だめかもしれないが……。

始業式が終わって各教室へ。といっても教室は空っぽ、みんな廊下でわいわいがやがや、二年生当時の友だちとその騒がしいこと。「誰それと分かれた」ことのと、また「誰と誰は一緒になれた」ことのと、とくに女子が騒々しい。なかにはべそをかいている者もいる。死別したわけじゃ

あるまいし、大げさすぎる。

担任が全部上がって来て各教室へ。最初の学活（学級活動の時間）がはじまる。生徒にとっても担任にとっても、先生や生徒を選ぶことはできない。偶然の出会いでこれからの一年間のつき合いがはじまる。

教室で「三年生は進路決定をひかえて大事なときだから、早くクラスの友達になれて、がんばろう」などと平凡なことを述べてこの日は終わる。市川はうしろの席で斜にかまえて、まだ虚勢を張っている。とにかく、パーマをおとさせねば。相談室へ呼ぶ。

「先生、何だよう。早くかえしてよう」

「お前がちゃんと僕のいうことをきけばすぐ帰してやるぞ」

「わかったよ。早くしてよ」

「何で呼ばれたかわかっているだろう」

「わかんない」

「とぼけるな！　その頭はいつやったんだ」

「ああこれ？　終業式の日（三月二十五日）」

「高いだろう。いくらだ」

「いくらだったかなァ。六千円ぐらいかな」

「もったいねえなァー。もう今日にも落とさなければ学校へ来れねえもんな」

「これもう落ちないの。のびるまでだめ」
「うそつけ！　落とす薬があるはずだ。それとも短くしてスポーツ刈りにでもするか」
「冗談じゃねえよ。やだよ。スポーツ刈りなんか」
「じゃあ、落としてこい」
「落ちないんだってば」
「そんなことはない。そのままじゃ学校へ来られねえぞ」
「じゃあ、来ないよ」
「バカいうんじゃない。卒業できないぞ」
「……」
「とにかくその頭はまずい。なおしてこい。わかったな」
「わかったよ。だから帰してよ」
「わかったな」
「わかったよ。しつけえな」
「あしたからちゃんとしてくるな」
「わかった、わかった。だから帰してよ」
「よしっ、帰れ」
全然わかっちゃいない。明日もこの頭で来るだろう。校門で追いかえしてやろう。それとも一

日中相談室にとじこめておくか。とにかく家には連絡しておかなければ。電話をかける……。
「あのパーマ、何とかなりませんか。お母さん」
「すいません。いつもご迷惑おかけして。いうことをきかなくて……」
「他の子への影響もありますし、学校としては認めるわけにはいきませんので」
「わかります。わかりますが……」
「明日あのまま登校したら、校門で追いかえしますので、すぐ床屋へつれていって下さい」
「わかりました」
でもだめだろうな……。

床屋へ行って、出なおしてこい！

四月七日（木）　入学式

八時十分、校門に立つ。これから一年間、毎日、週番の先生方とともに校門に立つことにした。今年の三年生は問題をもっている生徒が多い。登校する子に「おはよう」と声をかけ、一日の学校生活に意欲をおこさせようと思う。服装や頭髪の乱れている者には、根気よく注意する。これを一年間続ける自信はないが、とにかくやってみよう。他の三年の先生方も何人か立っている。別に申し合わせたわけではないが、やはり危機感をもっているのか、同じように「お早よう」「しっ

かりやれよ」「校章はどうした」「帽子はないのか」など、励まし、注意を与えている。
十五分がすぎ、予鈴が鳴る直前、生徒たちは校門に馳けこむ。そのどさくさのなかに市川もいた。頭はパーマのまま、カバンも何ももっていない。手ぶら。
「頭をなおすっていったじゃねえか！」
無視して通りすぎようとする。
「床屋へ行って、出なおして来い！」
「金がねえよ」
「うちに電話してやるよ。お金をもらってなおして来い」
「いちいちうるせえんだよ。いいじゃねえか、パーマぐらい」
「そうはいかん。きのうの約束だろう」
「知らねえよ。そんな約束」
「ふざけるな！　きのう約束したじゃないか。このまま家にかえってなおして来い！」
「そんならもう学校へ来ねえよ」
「バカなこというんじゃない。なおしてこい！」
「うるせえ！」
と捨て台詞を残して引きかえす。すぐに家に電話をかける。
「きのう床屋へ行かせなかったんですか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com